

ルカの福音書1章5～25節「ザカリヤへの御告げ」

神はどのようなことをお告げになったのか、そして、その御告げを受けた人たちがどのように応答したのか、ということから私たちに對する神の恵み、取り扱いを知り、私たちも神の恵みに応答していきたいと思ひます。

主がイスラエルにお語りにならない時代が400年以上続いていました。しかし、時が満ちて、神はご自分の御子をこの世に遣わし、人として生まれさせたのです。救い主イエスをこの世にお与えになりました。その歴史上に起こった神の特別な唯一のみわざをめぐって、神はいくつかの御告げを与えました。まず今日は、ザカリヤにあった御告げのことを取り上げます。

1. ザカリヤとエリサベツ (:5～7)

時は「ユダヤの王ヘロデの時代」です。ヘロデ大王と呼ばれるこの人は紀元前37年から紀元前4年にかけてユダヤの王でした。ヘロデは生粋のユダヤ人ではありませんが、ローマによって王権を与えられてユダヤの王になりました。その時期にザカリヤという祭司がいました。その妻エリサベツもアロンの子孫、つまり祭司の家系の人でした。6節。

「二人とも神の前に正しい人」であったとは、人には見えないところでも、すべてをご存知の神の御前に正しい態度であったということです。そして、その正しい態度は「主のすべての命令と掟を落度なく行っていた」と言われるように生活に表れていました。祭司とその妻としてふさわしく、律法に従った生活をしていました。二人に罪がなかったということではありませんが、「落度なく行っていた」という生活に表れていたのは、神に對する二人のへりくだりと従順であったと思ひれます。

二人は何の問題もなく、穏やかに生きてきたのかと思ひますが、そうとは言えないこともありました。7節。

この夫妻には子どもがいませんでした。そのことは彼らの痛みだったと思ひます。子どもが与えられないのは、神の祝福を受けられない何かがあるのだと考えるようになってしまうことがあります。それは問題です。でも、そういう問題があったことが旧約聖書に記されています。アブラハムの妻サラ、預言者サムエルの母ハンナなど不妊であった女性たちが苦しんでいました。しかし、彼女たちは神、主のご計画の中にありました。そして、主は彼女たちの人生で不可能を可能にしたのです。そのことを考えると、希望の光が見えてきます。

私たちも神に様々な願ひを祈ります。けれども、神に祈り求めているのに応えられないと思ひようなときがあります。祈りが聞かれないのは、神の祝福が与えられないのは、何がいけないのかと考えるかもしれません。

しかし、神が祝福してくださるのは、人が神の基準を満たすからではありません。神からの一方的な恵みによるのです。また、私たちの願ひ通りにならないことは神の祝福がないことではありません。神の祝福は、人が祝福と考えることと同じとは限りません。神が主権を持っておられ、神の計画があり、神の時があるのです。そして、神はこの世界を祝福し、ご自身の民を祝福してくださるお方です。「主は私たちをみこころに留め 祝福してくださる。イスラエルの家を祝福し アロンの家を祝福し 主を恐れる者を祝福してくださる。小さな者も 大いなる者も」(詩篇115:12～13)。ですから、みことばに堅く立って、主を信頼することが大事です。

2. 主の御告げ (:8～17)

「二人ともすでに年をとっていた」ので、子どものことはもう諦めていたかもしれません。そのような中で、神の時が来て、神の計画が示されます。不思議な出来事によって特別に告げられます。

ザカリヤの属するアビヤの組が当番の週になり、ザカリヤも祭司の務めをしていたところ、聖所に入って香をたく担当のくじがザカリヤに当たりました。ザカリヤにとって神に選ばれた光榮を思い、その役目を果たすべく緊張して聖所に入って行ったことでしょう。香をたくことは祈りを象徴しています。民を代表して神に祈ります。祭司が香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていました。

するとザカリヤに驚くべきことが起こりました。聖所の中で彼の前に主の使いが現れたのです。「これを見たザカリヤは取り乱し、恐怖に襲われ」ました。御使いは彼に言いました。13節。「あなたの願ひが聞き入れられた」、エリサベツが男の子を生むと御使いは言います。ところがその後、その男の子の誕生は、単にザカリヤ夫妻の喜びだけでなく、多くの人の喜びになると言ひます。

神はこの世にご自身の計画を行っておられます。私たちの人生も主のみこころの内にあることです。でも同時に、神は私たちの願ひを聞き入れてくださるお方です。もちろん、すべて私たちの願ひ通りになるということではないでしょう。

私たちは自分の思い通りに神を動かすことは決してできません。神は主権を持っておられます。ご自身のみこころを行われます。しかし、神はあわれみと恵みに満ちておられるお方です。主権を持ってすべてを御支配される中で、私たちの願いを聞き入れてくださるのです。そして、そのことは単に私たちの個人的な喜びだけでなく、多くの人にとっても喜びとなるように神がみわざを行われるのです。私たちの願いが聞き入れられることが、主の民に対する主のみわざの中で用いられるのです。

神のみわざは私たちの考えや願いをはるかに超えて、すばらしいものです。御使いが告げた神の計画はどういうことだったのでしょうか。15～16節。多くの人にとって喜びとなるのは、「その子は主の御前に大いなる者となるからです」。その一つは、その子が「聖霊に満たされ」、多くの人を「主に立ち返らせ」ることです。しかも、「母の胎にいたるときから聖霊に満たされ」ます。これは他には見られない特別なことです。神の御業の中で特別な働き人として選ばれており、用いられるということです。ヨハネが「イスラエルの子らの多くを…主に立ち返らせ」ということは、彼らの現状がそうではないということでしょう。しかし、そのような人々を「彼らの神である主に立ち返らせ」るのです。これは主の喜ばれることであり、人々の喜びとなります。主の御業であり、そのためにヨハネが用いられるのです。

「主の御前に大いなる者となる」ことのもう一つのことは、生まれてくる子、ヨハネが「主に先立って歩む」ことです。17節。ヨハネの働きは預言者エリヤの働きにたとえられます。マラキ4章5～6節。ヨハネによってこの預言が成就するということです。しかし、彼はあくまでも「主に先立って歩む者」です。そして、「主のために、整えられた民を用意」する者です。彼の後に主が来られるのです。

ヨハネは「不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせ」ます。この「立ち返る」ということばは方向転換を表し、悔い改めを意味します。人々が悔い改めて、主に立ち返るためにヨハネは働きをするということです。

3. 主の取り扱いと御業（：18～25）

18節。生まれる子どもがどのような働きをする人になるかということを受け止めるよりも前に、自分たちはもう年寄りだから子どもが生まれることはあり得ないという思いが先行してしまいます。つまり、御使いのことばを信じるのができませんでした。

19～20節。「この良い知らせを伝える」ということばは、福音を宣べ伝えるという意味で使われることばです。やがて来られる救い主によってもたらされる福音を指し示しています。その救い主に先立って歩むヨハネの誕生を知らせ、その後には救い主が来られるという良い知らせを御使いは伝えたのです。

しかし、その御使いのことばを信じないでしるしを求めたザカリヤには、一つのしるしが与えられることになりました。口がきけなくなり、自分が聞いた御使いのことばを人々に話すことができなくなるのです。実際に、神殿から出て来たザカリヤは話をすることができませんでした。

やがて務めの期間が終わり、彼は自分の家に帰りました。どんな思いだったのでしょうか。きっと自分の不信仰を悔い改めていたと思います。そして、御使いのことばを思い巡らして、信じて、期待したと思います。

しばらくして、御使いのことばどおりに、妻エリサベツは身ごもりました。彼女は神のみわざを感謝して、主を賛美しました。主の計画、主のことばはその時が来れば実現するのです。ザカリヤの不信仰のために、主の計画が変更されるとか取り消されるということはありませんでした。むしろ主は、ザカリヤが悔い改めて主のことばを信じるように取り扱ってくださり、そうしてご自身の計画を進めていかれたのです。

エリサベツから生まれたヨハネは後にバプテスマのヨハネと呼ばれます。御告げの通りに救い主イエス様に先立って歩む者となりました。彼は神に選ばれ、神の計画の中で、人々が悔い改めて主に立ち返るために用いられます。ヨハネの誕生と働きにおいて明らかになったように、主のことばは時が来れば実現するのです。

主はみことばと聖霊によって私たちにもお語りくださいます。そして、主の救いのみわざはイエス・キリストによって成し遂げられました。また、主は私たちの願いを聞き入れてくださいます。主の民のためにみわざを行ってください。私たちの考えを超えたすばらしいみわざが行われます。時が来れば実現します。ですから、私たちは聖霊に満たされ、みことばを伝え、イエス・キリストによる救いを伝えていきましょう。